平成24年6月8日（金）
アステールプラザ中ホール
13時30分～17時

第28回全国自治体政策研究交流会議・第26回自治体学会広島大会プレ大会
「地域から創る日本の自治～広島で描くまちとむらの未来～」

パネルディスカッション

（吉川）　吉川でございます。どうかよろしくお願いいたします。

これからパネルディスカッションを始めたいと思いますが，おおよそどのように進行を進めるかを概括的にお話しいたします。時間配分といたしましては，最初に，このテーマを自治体学会のテーマと結び付けている理由を少しお話しますが，その後は3人のパネリストの方々に20分ほど発表をしていただきます。発表は皆様のお手元にあります資料をもとに基本的にやっていただくことになっております。その後，私も質問をさせていただきますが，3人のパネリストの方々に，それぞれの分野でまちづくりをやっておられますので，意見交換があると思いますので，その辺を少し3人のパネリストの方々にやっていただいて，その後，会場の皆さんとパネリストの方々とのやりとりをしていただくということで，全体を進めていきたいと思っております。

最初に，パワーポイントで2枚程度なのですが，どういうことで広島の自治体学会のテーマとこの「まちづくりの最前線」がつながるかということを，私なりに理解していることをお話したいと思います。それでは，最初のページをお願いします。

最初に，廣瀬企画部会長から今回の広島大会の統一テーマというのを紹介していただいたと思いますし，この資料の中にも入っておりますが，毎年の自治体学会には統一テーマがあります。こういうテーマに今年の1月頃に企画部会の各メンバーで議論をして決めた訳です。「地域から創る日本の自治～広島で描くまちとむらの未来～」ということで幾つかキーワードが入っていますが，自治をもう1回考えましょうということ，広島から創りましょうということです。

それから，「まちとむら」というもう１つのキーワードなのですが，その時の「まちとむら」ということの意味は，ちょっと下に書きましたが，伝統的にはまちというと人口が集積している地域のことを言いますし，むらというと，広島でいうと一番分かりやすい表現は中山間地域になると思います。ですから，広島で都市地域と中山間地域とそれぞれの未来を考えようというのがこの統一テーマに入っていると思います。とりわけ，広島はこの間の合併で大規模な，数としては86あった市町が23になったということで，それぞれの自治体が非常に面積的に大きくて，1つの市の中にあるいは1つの町の中に都市的なものと中山間的なものを含むという基礎自治体が非常に多いということもあります。今日会場に来られている方々は基礎自治体の方が多いと思いますが，自分の市あるいは町でまちとむらを考えるということになります。こういうことで，今回のテーマを広島で考えることは非常にふさわしいと考えた訳です。

それから，一番下のまちづくりという点でも，これもいろいろな意味が歴史的に変わってきています。30年くらいまではまちづくりというと，どちらかというと都市の骨格を作るとか道路や橋梁を作るとか，今で言えば建設計画的なイメージが強かったのですが，この2,30年くらいで徐々にまちづくりという言葉を市長さんや公務員の方が使うと，もう少し広くて，いわゆるソフトの分野の，お年寄りの世話をするのにどんな仕組みがあるかとか，教育をどうするべきかという基礎自治体で考えるソフトなまちづくりというニュアンスが大きくなってきている

というのが大きな変化です。まちづくりといっても意味が変わってきていて，さらに突っ込んで，もう少し意味の違ったまちづくりを言う市長さんやあるいは公務員の方からすれば，「自治」ということも意識してまちづくりを言っておられる方がいます。自治というのは，文字通り，市役所という行政機構ということではなくて，コミュニティというからには自分たちで決めて，自分たちで負担して，自分たちで全体として統一性のある規範的なルールを作ろうということが入ってきます。こういう「自治」というところも，今日のお話の中で少し探れればいいなと思っております。

次のページに，3人の方に，会場の方も一緒なのですが，このテーマをこれから紹介していくにあたって，こんな問題意識が共通にあるだろうということを共有していただくために，10日ほど前に私がメールでお送りしたことがこの3つです。会場の皆さんもぜひ，これが共通する問題意識だろうと考えていただいて，3人の発表を聞いた後に皆さんからの発言ないし質問を期待しているということで，この3つを事前に紹介しておきたいと思います。

それでは，早速ですが，最初の発表をこれからお願いしたいと思います。有限会社ブルーリバーの取締役専務の岩崎積さんから，最初の発表をお願いします。よろしくお願いします。

（岩崎）　岩崎でございます。私ども有限会社ブルーリバーというものを作りまして，どうにか地域おこしをしていこうということで，スタートしているということでございます。これはこの発表のために急遽今年になって作りましたので，なかなかうまくいっていません。まだパソコンを始めて間もないこともありまして，ちょっと見苦しいところもあろうかと思いますが，ご容赦願います。

私どもの青河町というのは，この地図にありますように，三次市の中でちょっと西部のほうに位置している一番小さい地域でございます。主な交通機関としましては国道54号線。芸備線も通っていますが駅はありません。また縦貫道もありますが，これもインターチェンジがございません。主要なものは54号線のみでございます。

私どもがこのような事業を始めたきっかけといいますのは，平成7年，青河小学校という小さな学校が新しい建物に建て替わった訳でございます。その時私たちが思いましたのは，古い木造校舎，古い校舎を移築して建てた学校でございますが，この学校が建ちまして50年を超えております。当時，私どものこの小学校の人数は約130名おりました。それが平成8年に，新しい立派な新校舎ができたときに50人あまりしかいなくなっておりました。このままいくと，もうどうしようもないなと。これは自分たちの地域だから自分たちでどうにかしていかないといけない，どうにかこれを伸ばそうじゃないかということが，このブルーリバーの発足した基でございます。この平成8年に思いついた事業から，ずっとみんなで考えてまいりましたが，なかなか前に進むことができません。知恵もなければお金もないというところでスタートした訳でございます。

平成14年の6月，ブルーリバーは若者を呼び込む住宅をとりあえず建ててみようということで，地域で賛同してくれる人を募りまして，9名の出資社員を募ることができました。出資額900万円。下にありますように，出資社員への約束は，脱退しても出資金は返さない，出しっぱなしにしてください。他の人に譲ることは許してください。家族への相続，それだけにしてください。また，お金の配当は一切出しません。配当金を出すくらいなら家賃を下げようというふうなところでスタートしております。現実問題としまして，多少利益が出ましたので，配当金の代わりに家賃を下げております。これまでに2回，家賃を下げました。

この我々のブルーリバー，設立の目的でございますが，まず何よりも地域の価値観を高めたい，これが基本でございます。そのために小学校児童の確保に努め，小学校児童を確保することによって地域人口の減少に歯止めをかける。このサイクルを想定して作って，運営している

訳でございます。
　これが，発足当時のブルーリバーのメンバーでございます。この当時，メンバーで一番若い人は42歳，一番の高齢は72歳。女性1人。これがメンバーです。
　この定住事業への取り組みに，いろいろなことを考えました。私たちの地域は三次の中心部へ約10分，広島へも約1時間圏内と，自分なりに理解すると非常に便利な地域ではないかと思った訳ですが，なかなかそうは思っていただけないというところが苦労でございます。そのとき団地等による人口の誘致，これが一番手っ取り早いのではないだろうかと考えた訳でございます。しかし，団地等で人口を一度に誘致してまちの運営がうまくいくだろうかと考えたときに，やはり無理があるのではなかろうかと。あまりにも我々の人口が少なすぎるということで，我々の地域に合った人口の誘致をしていこうと。入ってきていただく方々は，我々は8常会を持っている訳ですが，極力各常会へ分散していこうと。まず何よりも我々の考え方に理解と協力をしてもらえる方々にお願いしていきたいということで，スタートしました。
　我々の建てた住宅への入居の条件ですが，必ず小学生以下の子どものいる家庭でなければならない。学校教育への理解と協力ができること。地域の行事には積極的に参加してくれること。常会へは必ず加入すること。こういう条件を掲げました。やはり，この中で，応募していただく方の中で条件に合わない方もございます。そういう場合にはお断りすると。そういうことで，こういう条件を設定いたしました。
　これは平成14年の10月2日の中国新聞の記事でございますが，9人で出資したこのブルーリバー，ようやく最初の1棟目，2棟目を建てることができました。右側の写真が棟上げの時，出来上がったのが左下の写真でございます。この家が建ったときに周辺の方々が空き家にしていたり，崩そうとされておりました。そこで我々にくれないかなと話をしましたところ，転居されました方が古いこの住宅をブルーリバーのほうへ「じゃ，やるよ」ということで，無償でいただきました。修理にしても大変コストがかかりますので，ここで作業をしておりますのも我々ブルーリバーのメンバーでございます。職人さんではなく，中電の社員さん，マツダの社員さん，公務員さん，農業をしている方，さまざまでございますが，自らの手で，みんなで直そうということで，毎日酒を飲みながら楽しんで作業をしました。
　それからこれは，そういうことから手に入れた中古の住宅でございます。現在は中古住宅2棟，それから管理住宅も持っている訳でございます。
　これは，最初の永住家族の決定と出ておりますが，一番左側にあります永住家族，これが最初に青河に永住します，骨を埋めますということで来てくれた家族の住宅でございます。その右側にございます3号棟，4号棟。これは賃貸で貸している住宅でございます。全て賃貸の計画で建てた訳でございますが，この青河に住もうと来ていただいた家族，その方に最初ここでお売りしたしたというのが第一歩でございます。平成19年に7棟の新築住宅と3棟のリフォーム住宅で，ブルーリバーを設立した時の当初の目標でありました10棟目を達成することができました。
　ブルーリバーの利益でございますが，最初申しましたように，ブルーリバーの利益は地域に人が来てくれることと地域が元気になることが利益でございます。収益，お金が多少余った時は家賃を安くするという形で，これまで2回，中古住宅（リフォーム住宅）のほうの家賃を下げるということをいたしてきました。ブルーリバーでいう利益は開放しております。地域として利用して下さいということで，その利用方法としましては，入ってきてくれた人々，その人材的な利用であるとか，生活的利用であるとか，近くに人がいるという安心的な心理利用，こういうことがあろうかと思います。
　青河町には，空き家がたくさんではありませんが多少ございます。そのような空き家にも私どもは働きかけを行っております。しかし，どこの地域も同じだろうと思いますが，荷物があ

るとか，墓参りに帰るときに困るとか，修繕費の負担とか，こういうところでなかなかこの住宅を提供してもらうのは難しゅうございます。そこで平成22年度から，私どもが考えましたのは，家主からは現状のままでブルーリバーがお借りします。賃料はブルーリバーが家主さんにお支払いします。ブルーリバーが修繕をし，この修繕費を上乗せしたものを居住者のほうへお貸しし，家賃として収入を得るという制度で，すぐに1棟目の住宅を使わせていただくことができました。

ちょうど今年でブルーリバーが発足しまして10年になる訳でございますが，この10年間の定住促進の成果でございます。一番左端にあるのが，最初平成17年に永住として購入してくれた住宅でございます。それから真ん中と右端の住宅でございます。これはブルーリバー住宅に一応賃貸で入ってきていただきまして，何年間か住んでいただいて，青河の地域なら住めるということで近所に自ら自分の住宅を建てていただきまして，青河に永住している家庭でございます。この3家族のマイホームの新築をしていただくことができました。また，ブルーリバーが持っております住宅10家族38人，合わせまして14家族の計60人が現在青河で住民として増えております。60人ということで発表しておりますのでちょっと言いにくいのですが，つい先日61人に増えております。

私どもブルーリバーの未来でございます。ブルーリバーはれっきとした有限会社でございます。ここで定款もあげております。定款の中には賃貸住宅の建設，農産物の加工販売，地域づくり会社を掲げております。現在ブルーリバーは1万4,000㎡の開発用地を保有しております。もうほとんど青河には帰らないという人たちから我々に話をいただいた土地でございます。これらの土地を利用して我々ブルーリバーが考えておりますのは，住宅を建てるのはもちろんでございます。今年度も計画しております。このワンストップステーション計画と申しますのは，青河の地へ1つのステーションを設けまして，そこに青河へ来られる方々に集まっていただく1つの場所を提供します。そこから各農家へ，青河へ来られた方を案内します。各農家には大根もあればレタスもあります。柿もあります。白菜もあります。農家にないのは労働力です。農家に労働力，品質，安心，安全，交流をステーションを通じて一気にお届けしていきます。来ていただいた方々は，我々の案内で，大根が欲しいとおっしゃれば大根を作っている農家，柿が欲しいとおっしゃれば柿のある農家，そこへ案内し，自らもいでもらいます。それによって，高齢化した農業の多少の支えにはなるだろうと考えている訳でございます。

こういう取り組みが我々にできました要因の1つには，メンバーに恵まれたと思っております。また，活動の成果がこれまでに見えてきたこと，それからみんなで楽しみながら出来たこと。これらのことと同時に，我々の地域が衰退している現実を誰もが同じように感じていたことが最大の要因ではなかろうかと思っております。

このような定住政策へ，我々が要望したい問題が多少ございます。地域における就労の問題でございます。それから，私どもの地域はほとんどが農業地域でございます。農地は，ほとんどが許認可制度というのがございます。現状に応じた許認可とスピードアップ。農地が荒れているというのは作り手がいません。そういうふうなところから荒れていく訳でございます。しかしながら，そのような農地でも農地法という制約をかけられて，なかなか自由に使うことができません。そういうところも行政には考えてほしいと思っております。また，行政の長期的ビジョンの方向性。これは，政策が変わるたびに方向性が変わっていったのでは，我々はそれを頼りにやっている訳ですから，困るところがございます。やはりこれだけは変えないよという，そういうものが欲しいと思います。また，Uターン者，Iターン者への手立て。地域を守っている者，これが地域の財産となっている訳でございますが，この地域を守っているものが報われる，このような施策を作っていただかないと地域は衰退していくのではないかと思っております。

以上が，私どもが活動してきました部分的な説明でございます。なかなかお分かりになりにくい点もあったと思います，慣れておりませんので，よろしくお願いします。

（吉川）　どうもありがとうございました。いずれまた詳しくディスカッションをしたいと思いますが，次につなぐために1つだけお伺いしたいことがあります。やっている趣旨が非常に公共的な価値を感じるのですが，NPO法人ではなくて有限会社という会社を立てることを思いついた経緯や，会社だからよかったという点があれば，今の話に補足してお話いただければありがたいのですが。

（岩崎）　なぜ行政に頼まなかったかとか，いろいろ質問を受けるわけですが，やはり一番責任が持てるのが我々の組織だと思います。NPO法人なども話し合いの中では出てきてたのですが，補助金に頼って，その規格の中で我々が行動したのではどうしようもありません。我々の規格で，我々の思い通りのことが出来るほうがよいということで，有限会社という方法を選びました。

（吉川）　どうもありがとうございました。それでは，岩崎さんに続きまして，澤田さんからお話をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

（澤田）　みなさん，こんにちは。ご紹介いただきました谷自治振興会の澤田でございます。今日はこうした機会を与えていただきまして，本当にありがとうございます。不慣れでございますので，どこまでご紹介できるか心許ございませんが，最後まで頑張っていきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

「住んでよし，訪ねてよしの谷づくり」，これが私どものテーマでございます。飯南町のまちについて少し紹介させていただきます。飯南町は松江市と広島市を結びます国道54号線のほぼ中間地点にございます。中山間地域でございまして，北西には，大山隠岐国立公園三瓶山，そして東には大万木山という山々に囲まれた大変緑豊かな自然いっぱいの地域でございまして，「命彩る里　島根県飯南町」といたしております。人口は5,500人ほどでございます。

私の住んでおります谷地区をご紹介いたします。飯南町の中で南西に位置する，ここが谷地区でございます。谷地区は大きく3つの集落から成り立っております。歴史をひも解いてみますと，江戸時代は石見銀山の直轄領，いわゆる天領でございました。古い地図を見てみますと，この辺りに記載しておりまして，出雲の国，備後の国そして石見の国という3つの国の国境にある所でございます。それ以後，合併を重ねてまいりました。当初島根県は出雲，石見，隠岐と3つの大きな国に分かれていたようでございますが，私どものところは石見の国，浜田県という所に属し，以後石見の国としてやってまいりました。昭和28年，合併によりまして，喧々諤々の議論の後，飯石郡赤名町になりました。以後飯石郡で合併を重ねることとなりました。今回平成17年，頓原町と合併をいたしまして飯南町というまちになったところでございます。

暮らしぶりにつきましては，古くからそうした事情もありますので，共存共栄，由緒ある村として穏やかに生活をしていたと記されております。また，政治意識や勤労意欲は非常に高いものがあったと聞いております。

産業についてですが，特に目立ったものはなく，昭和時代は水稲，養蚕，和牛，それから炭焼き，製炭が営まれておりました。現在は兼業を中心とした水稲，そして高齢者の方を中心にぶどう栽培が順次進められております。

戸数人口につきましては，昭和10年代に200戸1,000人という時代がございました。以後急激に減少し，昭和38年の豪雪そして高度経済成長ということで，現在では90戸あまり260人とい

う人口になっております。
　人口の構成を見てみますと，全世帯のうち21世帯が独居世帯でございまして，高齢化率は47％になっております。人口の割合で見ますと，60代以上が半数以上でございまして，この過疎地域おいては，特に目立って0歳から40歳までの皆さんがバランスよくいるというところが，大変特徴のある地域ではないかと思っております。現在活動を進めている主な世代というのは50代から70代になりますが，これにつきましても，半数以上の方が占めているということで，大変活動しやすい地区でもございます。
　谷地区の様子でございます。
　私ども谷自治振興会は，昭和40年代後半，大変過疎が急激に始まったということで，過疎対策委員会というのができました。特にテレビが難視聴の地域でございましたので，これを解消しようということで，全戸で金銭的な負担をして共同受信施設を作り，そこから電線を張るということで，この対策に取り組んできました。昭和56年になりまして，谷地区全戸で加入されて谷振興会というものがスタートいたしました。特に行政，国や県に対して要望したいということでできたようにも聞いております。目立った活動といたしまして，県道55号線。当時1時間くらいかかっておりましたが，現在では20分で通り抜けるという道路になりました。用地買収等についてはできるだけ地元で話し合いをしてお願いをするということで，早期の改修工事を進めていただきたいということで運動されてきたように思います。合併を前にしました平成16年6月，自治区の再編ということもありまして，町内でいち早くこの谷振興会から谷自治振興会に移行して設立いたしました。明るく住みよい地域を作っていこうということで，スタートしました。
　組織としてはこういう形になっておりまして，事務局，事業部，総務振興部を中心に活動を進めております。また地域協力隊にもお出でいただいておりますので，このような位置で支援をいただくという形になっております。2つの会議を持っておりまして，輸送活動運営会議そして谷笑学校運営会議がそれぞれの役割を果たすように活動をしております。谷地区には各種団体がたくさんございまして，谷公民館，老人クラブ，婦人会を始めとしま主なもので13ございます。それぞれの趣味を活かした小さな団体というものもございますが，これらがそれぞれ協力し合っていろいろなことを進めていこうということで，自治振興会が連携役となっております。
　輸送活動について，ご紹介させていただきます。島根県自治会等輸送活動支援モデル事業の枠組みにのっとって行っているものでございます。飯南町の中で谷地区はこの位置になるのですが，国道54号線に沿ってさまざまな施設等がございます。谷地区には公民館，週1回開設される出張診療所，そして郵便局という3つの公共の施設がございます。郵便局，出張診療所，公民館，笑学校となっております。この取り組みに加わる理由といたしまして，まず1点目は，程原地区という所がございますが，週1回の電話予約による町営の巡回バスが運行いたしておりました。お互いに不便だということもありまして，利用者がどんどん減っていきまして，平成21年に廃止をしたいということが町から示され，これによって程原地区には公共交通がなくなると懸念されました。程原地区は全部で8世帯でございまして，そのうち5世帯が独居世帯です。高齢化率は92％です。かつては，しいたけ生産等で，全国でも指折りの地域でございました。各地から視察等にたくさんお越しいただいたという所でございますが，現在はこのような状況になっております。
　2番目といたしまして，谷地区には交通不便地域があるということで，特に買い物，病院への通院は，（タクシー）事業者にとっては離れていることもあって利用する距離によっては赤字になる地域でございます。そうしたことから，町から相互に助け合って公共交通を補完するシステムということで，このモデル事業の提案がございました。道路輸送法でみますと，有償輸

送と無償輸送がございますが，自治会等の輸送活動はこの部類にあたります。利用者が負担するのは燃料費以内ということで，その他の経費については自治会等の全体の中で負担するということで無償の扱いとなるということが，県との話し合いの中で出たものでございます。

県のほうから飯南町に補助金が出まして，自治振興会といたしましては，車両を貸与いただいて活動します。そしてその報告課題等を町に上げる，それを県に上げるということで流れていくようになっておりまして，期間は一応5年間となっております。

私どもの輸送活動運営会議の中で，さまざまな取りきめごとをいたしまして，運転者と利用者の間を取っているということで，全体の活動の中で輸送活動を行っているという訳でございます。運行の形態といたしましては，利用される皆さんは会員の皆さんで，運行する区域については谷地区内もしくは高速バスのバス停までと，話し合いの中で決めております。運転者につきましては，谷地区自治振興会の会員の有志の皆さんで，運行の予約は3日前までに公民館にしていただきます。運行日につきましては，通常は平日9時から18時までです。利用料は燃料費だけですが，1回200円分の会員券になっております。輸送バスの運転手については，会員であることと２種免許の所持もしくはこちらのほうで決めました講習を受けていただくということで，自主的な制限と制約を設けております。現在13人の方々にメンバーになっていただいて，業務を行っております。利用の方法でございますが，まず会員券を買っていただいて，乗車する3日前までに電話で予約していただきます。予約がありますと，公民館で手配をいたしまして，連絡をさせていただきます。そして当日乗っていただいて，会員券を出してもらいます。このような流れになっております。これは実際の輸送車両で，「せせらぎ号」という名前を付けております。実際に利用していただいたときの様子でございます。選挙の投票に行くのにも利用していただきました。

これまでの利用者数及び運行日数でございますが，年々増えておりまして，当初ここまで利用者数があるとは思っておりませんでした。平成23年は628人になりました。延べ人数でございます。月別に見ていきますと，多少気候等の関係もございまして前後いたしますが，月平均で言いますと10日前後，利用者数は50人あまりとなっております。これは新聞に載せていただいたもので，当時全国でも珍しいということで，これを機会に全国から沢山の皆さんに視察等にお越しいただきました。利用される皆さんは大変喜んでおられて，実際に利用される方というのは20人あまりでございますが，延べ人数ですとこういう形になります。

次に，スノーレンジャーについてご紹介させていただきます。スノーレンジャーは各種団体の1つでございます。私どものところは，一晩で1mくらいざらに降るところでございまして，雪の非常に多いところでございます。これまでは自力あるいは行政にお願いをして除雪作業をしていただいておりましたが，これを何とか地域で対応できないかということで，このスノーレンジャーを立ち上げました。会員17名を募りまして，資金を出し合い，「いきいきファンド助成」がありましたので，それに合わせて除雪機を2台購入しました。活動の内容といたしましては，除雪作業と雪まつりの開催，雪の道具作り，豪雪の歴史と県道55号線をＰＲしていこうということで活動をしております。

実際に除雪作業でございますが，木戸道や庭，屋根から落ちた雪の除雪機による除雪作業ということで，屋根の雪下ろしはいたしておりません。料金につきましては1時間以内1,500円，以降30分毎に500円ということで，公民館もしくは会員の方へ連絡していただくということになっております。これは実際の雪かきの様子でございます。

雪まつりととんど，これは平成24年も行いました。これは，雪の道具作りを子どもたちとしたものです。これはホームページにも載せております県道ＰＲです。

将来に向けまして，助け合う地域というものを次世代にも続けていきたいということ，そして何よりも地域の情報をいろいろなところへ発信したいということで，安心感のある元気な地

域を作っていきたいとスノーレンジャーでも思っているところです。
　次に，旧谷小学校についてご紹介いたします。明治8年にこの学校は開校になりました。昭和3年に現在の校舎が出来まして，築84年，県下で最も古い校舎の1つとも言われております。平成17年3月に閉校いたしました。130年間，卒業生が1,538名でございました。この年，同窓会を作りまして，卒業生と在校生と教職員の皆さんで構成しました。当初は毎年やっておりましたが，なかなか人数が集まらないということで現在は隔年で総会を行っております。この学校が閉校になりまして，以後，この校舎をどうしようかということで検討を重ねてまいりました。特に屋根の傷みが非常にひどかったということで，いろいろ考えましたが，平成21年度に，国交省の事業によりまして改修工事をしていただきました。翌平成22年4月に，交流拠点施設「谷笑楽校」という名前にいたしまして開校いたしました。この施設は，町から指定管理を受けて管理運営しているものでございます。同じ年に地域おこし協力隊に来ていただきましたので，ここに常駐していただいて，さまざまな活動に支援をしていただくということになりました。現在は谷間の楽校，育児サロンや各種団体のイベント等の開催に利用したり，卒業生の作品ですとか地域情報の発信等を行っております。卒業生や来校者，視察者，谷地区住民の交流の場として，たくさんの方々に来ていただいております。
　これまでの笑楽校の歩みについて，少し動画を見ていただきたいと思います。
（「谷笑楽校」開設までの歩みや活動内容を紹介したＤＶＤの放映）
　以上でございます。ありがとうございました。

（吉川）　どうもありがとうございました。1つだけ補足的に教えてもらいたいのですが，自治振興会が車を運行するという前は，デマンドバスといいますか，町が経営するバスが飯南町を回っていたのですよね。谷自治振興会が新しい提案に基づいてやったときに，他の地区というのは，つまり前にバスが走っていた他の地区では，谷自治振興会の周りには別の振興会があったと思うのですが，その周辺の振興会はこの新しい提案に対してどうされているのでしょうか。バスの運行がなくなってしまったときに近所の地区はどのようになったのでしょうか。

（澤田）　町営の県道を走るバスはありまして，そこから離れた地域へのバスがなくなるということで，業者さんとの話し合いといいますか，町で折り合いがつけばいいですよという県の話がございまして，なかなか谷地区以外の集落では話し合いが進み難いということで，最初とりあえずやってみようということで，私どもが始めました。県下でも4つくらい候補があったのですが，どこもやられなくて，私どもだけがスタートしたということです。当時，私も思ったのですが，何分おきにバスが来る都会の交通事情と，1時間以上待ってもバスが来ない田舎の町が，全く同じ法律の下でやるということを続けていくことが本当に地域にとっていいことなのかと思いました。やはり根本から見直してもらいたいと，そのとき本当に思ったところでございまして，今でも交通不便な所はあります。その辺りも何とかしたいと思う所もありますが，業者との折り合いもございまして，そのところで思うようにならない一面もあります。

（吉川）　他の地区では，タクシーでこのニーズを賄っているという実態ですね。

（澤田）　そうですね。場所によっては，そういう事情もあります。

（吉川）　どうもありがとうございました。続きまして，3番目の報告をお願いしますが，岡田さん，よろしくお願いいたします。

（岡田）　みなさん，こんにちは。職場を離れまして12年が経過をいたしまして，高齢者の仲

間入りをしなければいけないときに，こういった場にご案内をいただきました。これからお話をすることは，1970年代ごろから内子のまちで，まちづくりの仕事を一筋にさせていただいた，その積み上げた状況を皆さんにご報告しなければならないということで，40年という長い期間の話を20分で皆さんにお伝えするというのは容易なことではないので，今からこの映像を通じて，どんなことを内子のまちがやってきたか，その背景にどんな思いで取り組んできたかということをお話しながら進めていこうと思います。今日，皆さんのお手元にお配りしておりますレジュメについては，大体この映像の中でお話しすることを集約したものを，メモ書き的に記載したものだと受け止めていただいて，また後日，参考にしてください。ただ今から始めます。

私のまちはごくありふれた田舎町で，1970年代，すでに過疎と高齢化が始まっておりまして，その頃から谷を埋め，企業誘致でもしなければ，まちの人は食べていけないということで，まちづくりが始まります。そのような中で，私たちというよりは私自身と言った方がいいのでしょうけれど，右下がりになっていくまちを救っていく基本的な担い手というのは誰なのだろうということです。選挙で選ばれる首長もいらっしゃるし，それから同じく選挙で選ばれる議会の議員さんたちがいるし，それから住民の皆さんが払う税金でもって養っていただく公務員という私たちのような身分の人間がいます。誰がその役割を担っていけばいいのかというときに，やはり公務員倫理の1つのあり方として，税金でご飯を食べさせてもらっている私たちは，見方によってはその道のプロであるべきなので，そうした視点で一汗，二汗頑張っていくのが私たちに与えられた使命なのだろうというのが，私なりのまちづくりへの原点ということです。

内子の所在地というのはこのようなところです。今日お話しする主な内容は，この石畳というところで，世帯数が130少々の小さな農村集落の中での新しい取り組みについて中心にやっていこうと思います。

その前に，町並み保存の話が出ておりました。できるだけ省略して話します。これは修理後の建物の状態なのですけれども，この屋根はペンペン草が生えて雨漏りがするような状態で，これを1970年代後半に修理をしていきます。このようなことを限りなく続けて，このような明治の町並みが再現化され，今で言えば愛媛県でも有数の観光地になって，多くの方が来ていただけるような観光地にまで成長しましたという自慢です。自慢の裏側では，建物以上に，この建物の中に住んでいらっしゃる方の高齢化が進んで，これから先々ずっと家を守る人がいなくなっていくという大きな難題を抱えている状況です。

かつては，町の中をこのように，電柱が林立していたものが撤去されます。この辺も電柱や電線が取り払われることによって，絵になる風景が再現されてきた状況でもあります。しかし，土曜，日曜は，大体このような形で，観光バスから出されるお客さんの行列が延々と続いています。ごみだけは落としていただくのですが，なかなかお金が落ちるというところにはつながっておりません。これが，観光振興に対するある種のまやかしだと思って下さい。

町並みの変遷として，このようにビフォー＆アフターで映像として見れば，何をしたかということが明確です。内子座という芝居小屋があるのですが，この劇場も1980年に残すか，壊すかということで，商店街の人に意見を聞いたところ，70％の人が壊して駐車場にした方がいいだろうという短絡的な結論が出されます。しかし，これだけの財産を壊してしまうのはもったいない話ですし，やはりまちの個性や特性を活かしていくにはぜひとも残していかなければいけないものだということで，7割の人の反対を押し切って，逆に保存の方向へ駒を進めていくことで，今では一番の観光資源に成長しました。年間4万人くらいの人たちに入館していただいています。よくハコモノということで観光振興を考える事例が多いのですが，あるまちの面白い話なのですが，10数億円のお金をかけて大きな観光資源が作られるのですが，オープンした当初は何万人というお客さんが入って来られるのだけれども，今日時点では2万人を切ってしまうという話で，あまりモノに頼って観光振興を考えるとうまくいかないという事例もまた仕事の

中で勉強させていただきました。また，これは先ほど写した写真なのですが，ビフォー＆アフターとして見て下さい。これも，右側に写っている写真の建物は現在レストランになっています。その前の姿が左側です。これも先ほど見た映像なのですが，事前事後の風景がこのように変わりました。これらに要したお金の使い方ですが，トータルで2010年までのデータなのですが，6億6700万円を国庫補助金と一般財源から持ち出してきました。これが全部，地域住民の皆さんへの修理のための補助金として使われたお金です。単純に言えば，30年にわたって町並み保存事業を続けてきた積み上げ額が，6億6700万円の投資なのだということです。それだけの投資をすることによって，1つの観光資源がまちに出来上がりましたと理解をしていただきたいです。広島でも竹原辺りが先進地として頑張っておられますので，詳しい説明は省きます。単年度の平均的な投資額は2,000万円少々でこれだけのものが出来上がるのですから，財政的に見れば，それほど大きくないということで，ものは考えようだということです。

観光ということを整理して考えないといけないのですけれども，私好みで言わせていただくと，2段目に書いてありますように，本来の観光資源というものは，地域が持っている品格あるいは人格あるいは地域格という，そのような特性を「町格（まちかく）」と呼びたいのですが，そこの中に存在する歴史的環境があることによって，まちの観光資源の所在というものを窺い知ることができます。よく文化論の中で出てくるのですが，「文化とは何ぞや」という言葉がありますが，やはりまちづくりの1つの考え方として，なりふり構わずということではなくて，なりふり構うことを通して，地域の品格というものをきちんと確立していく運動をどう起こしていくかということ，このことも詳しく話すと，20分も30分も話さなければならないので省きます。いずれにしても，真の地域のブランドを持つ喜びを，まちの人が一様に持っていただくことがいいのだろうなと思います。論語の中にもありますが，「近くの者喜び，遠くの者来る」。つまり，まちの人が喜ぶものでないと，本物の観光はできませんということです。これは，先ほどの芝居小屋の前後の写真です。このように様変わりで，私のまちの一番の文化ホールとして活用していますし，国際シンポジウムも5,6回開催してきましたということでは，愛媛県でも結構な名物に成長することができました。

同じく観光というものを考えたときに，これは私なりの経験則なのですが，観光行政の意図するところというのは，いかにたくさんの観光客を我がまちに迎え入れるかということを問われる訳なのですが，例えば入り込み客を100万人，客単価が1,000円だと10億円です。それだけのことをやろうとすると，インフラで駐車場を作らないといけないし，トイレも作らないといけないし，レストランや土産物店だとかいろいろなものが出てくるし，観光関連の旅行業者等々の参画もそこの中に出てくるのですが，逆に入り込み客を10分の1にして客単価を10倍にすると，水揚げの部分は同じ10億円なのですけれども，観光インフラというものは全く要りません。つまり，ここにもまちづくりの1つの妙味というものを見出していただきたいと思います。要は，観光資源というものは，その地区に住んでいらっしゃる住民の皆さんが作っていくものということです。従いまして，利益は住民の皆さんにしっかり還元されるということです。それが，観光行政の基本にどう位置づけられるかということなのです。

町並み保存の理論というのは，省かせていただきます。これも理屈を言えば，長くなります。要は，歴史的環境が大切だということです。これも観光なのですが，下手に観光で騒ぐとお金儲けに向けた幻想にすぎなくなります。まちが有名になり，多くの人が来て，飲食店が儲かり云々ということですが，なかなか世の中このようにうまく回ってはくれません。

これは，内子町における近年の観光動向で，100万人前後を推移しています。

もてなしの心というのは，景観形成からということで，要は美しいまちを作る，きれいなまちを作ることが，まちづくりにとっては結構大切なことです。私のまちでも出てくるのですが，まちの人たちが考えていものの見方や考え方は，つまり価値観というのでしょうか，真ん中の

行にあります「田舎コンプレックス」なのです。田舎であることがやはり恥ずかしいとか，田舎であることが嫌だということが，繰り返し巻き返し語られるところに，変な都市化が進み，都市化によってまちの個性というものが失われていきます。そういうことでは内子というまちの良さが全く見えてこなくなってしまうというところから，歴史的環境保全と景観形成をしっかりやっていきましょうということが，これまでの40年間の歩みでもあります。

「町並みから村並みへ」というフレーズは，自作です。ある時期，私なりに心変わりをいたしました。まちの存在というのが，まちを取り囲む周辺の農村集落に元気があるかないか，農村集落がいきいきと息づいているかどうか，そのことがない限り，在郷町といわれる中心市街地もそれ自体が周辺の農村集落と一緒に右下がりになってしまうという点では，むしろ町並み保存以上に村並み保存という，私なりの呼び方なのですが，そのような名前を付けて，農村の人たちが元気に暮らせるコミュニティ環境の再構築といいますか，堅苦しい言い方をすると，そういうことに取り組みました。

取り組む手法は，この模式図を見ていただくとお分かりかもしれませんが，左側の流れが一般的にある姿だと思います。赤でわざわざ補助金型と書きました。別な言い方をしますと，役所流の地域のコミュニティの形なのだと思います。ここの原則論は多数決の肯定なのです。何事も全て多数決でもって決めて，行動しましょうということです。私の方で新たにチャレンジしたのが，地域づくりを進めていく，農村集落の中で新しい運動を進めていくには，どうも既存の自治会という組織ではなかなか運動がうまく進みませんので，右側にあります「石畳を思う会」という，これとは全く正反対の組織で，ここの中にある25名の皆さん方は「この指とまれ」で集まってきて下さった方々です。いわゆる「石畳」という小集落を，何とか俺たちの手で生き返らせようという思い込みの強い人たちの集まりです。自前型なのです。補助金は一切使うまい。それから，みんなが賛成することは時代遅れだということで，多数決の否定ということをあえて書きました。本音でもって地域を考える小集団です。この人たちの自立を何よりも一番に求めた運動になりました。

のような石畳の地域に残されている名所の保存運動も，当然やらなければなりません。これは登録文化財になりましたけれども，このようなものもきちんと地域の財産として管理をします。何よりも彼らが頑張ってくれたのは，もてなしということを前提とした地域づくりです。そういうことで何が出来るかということですが，いわゆる絵ハガキとして地域を見る目をそれぞれの25名のメンバーで養っていきましょうということと，先ほどお話ししました「田舎コンプレックス」からの脱皮です。そのようなことを中心に，いろいろな所に勉強に行きました。スイスにまで旅をすることになるのですが，よい学習ができました。

これは，まちが作った，行政が作った仕事なのですけれども，130世帯の小集落の中に農家民宿を作りました。集落の人は全員反対です。あえて作ったのですけれども，オープンから今日まで，この農家民宿というものはありがたいもので，黒字経営で，今でも2,000～3,000人（内宿泊者数は１０００人前後）の人が足を運んで利用してくれているという名所に成長できています。もちろん，地元のお母さん方の経営なのですけれども，このようなものも彼女らの汗かきの成果品なのです。水車を作って水車祭りをやって，ホタルをちゃんと保護して，ありがたいことに，彼女らはホタル祭りだけはやらないのです。ホタルで生ビールというのはやめようという高邁な主張を持っていますから。あと，これはホタルが育つ川づくりとして，近自然河川工法ということで，これはスイスで学ぶ話なのですけれども，このように川の環境を守る整備もしています。10年後，15年後の姿がこれです。川づくりというのも結構地域づくりとして大切な課題となっています。

このような活動をやりながら，今が存在しています。漸く農家の人たちの集落全体の考え方

として，これまでずっと行政に依存し，政治に依存し，役所というものは何か自分たちのためにしてくれるものだということから，地域というのは自分たちが主体となり，自分たちの自治として頑張っていかなければならないことなのだということを少しずつ分かってくれ始めました。運動を始めて30年が経過しましたから，やはり地域づくりというものは時間がかかるものだと，今になって感じ入ったところです。それでも，自立ということがこのような運動を通して身についてくれるということですから，では今までやってきた公民館活動は何だったのだろうと，反面感じ取られる一面もなくはないのですが，それはそれとして，新しい自分たちが中心となって地域の経営が出来ていくということが結構大切なことなのではないかなと思います。

彼らの活動の基本的なコンセプトは，公的な肩書きは一切求めません。会則もむろん持ちません。補助金に頼らず自立をします。多数決で決めず提案者がリーダーとなり事務局となって汗をかきます。いたずらに会員は増やしません。打算は語りません。さぼったから得をして，参加したから損をしたというばかばかしい話はやめましょうという，そのようなことが舞台裏で暗黙の了解事項になっています。村並み保存運動というのは，そういう意味では，先人から受け継いだ地域の資源を食いつぶしてきたのだという認識の下に，新しい富を孫子のために作りだしていきましょうということが基本でもあります。

ちょっと時間をオーバーしますけれども，「引き算型まちづくり」というのを晩年になって提唱しました。どうすれば地域がよくなるかということは，内子の町でも多く語られるのですけれども，やはり考え方は足し算なのです。あれを作ろう，これを作ろう，あれをしよう，これをしようとするのですが，どうしても足し算ではいくら加算しても，なかなか地域はよくなりません。よくならない背景には，よくならないなりの要因が地域には根太く横たわっていて，それを取り除かないとどうしようもならないのではないでしょうか。その要因にはいろいろな問題がありますけれども，先ほどお話しした依存体質というのもそうですし，それから下に書いてあります責任転嫁というのもそうなのです。住民から行政職員に何かもの申すと，予算がありませんと言って，ちゃんと逃げる言葉を持っています。上司が予算を付けてくれませんと。いろいろなことがあるのですが，そういうものを1つずつ払拭しましょうということが，引き算型まちづくりで，今，石畳の人たちはそのような点ではだいぶ自信に充ちた地域づくり運動に汗をかいています。このようなことが，今まで40年間内子町で取り組んできた運動の集約なのです。

早口で話してしまって，申しわけありません。以上です。ありがとうございました。

（吉川）　はい，ありがとうございました。最初に岡田さん自身がおっしゃったように，長らく公務員をご自身がやっておられて，今はこのようなご紹介いただいたような活動をやっておられるのですが，実は今日この会場におられるのは公務員の方が結構多いと思いますが，行政に依存しないとか，多数決で決めないということを，ご自身が行政マンであられたときにだんだん気付いてこられた時のディレンマというのは，どのように頭の中で整理されてきたのでしょうか。

（岡田）　まず，組織の中ではやはり「はねっ返り者」といいますか，場違いの人間扱いで随分嫌な思いもするのですけれども，私の経験では，周囲の人たちが反対すること，そのことに挑戦することがまちづくりの正論ではないかと。みんながヨイショするようなことを言うのは，いくらやってももう時代遅れなのだと。今更そのようなことをしてもとか，そのようなばかばかしいことをやってどうするのだというようなことこそ，結構大切なことがそこの中に横たわっているということですから，組織の中の常識論というものは，新しい地域づくりという視点から捉えたときには，もうほとんど，これは私の偏見かもしれませんが，もう非常識論だと。

逆に常識論とは，あなたたちが持っている非常識論がそのまま常識論に置き換わっていかない限り，まちの未来というのはなかなか見えてこないのではないだろうかということです。

（吉川）　ありがとうございました。
　これから，パネリストの方がそれぞれ聞いておられて，何か共通点や違う点など，課題意識を共有できるところがあれば，1つ，2つ，問題提起をして，こちらでは澤田さんのところではどうでしたかというような，そのようなお話があればお話を1つくらいしていただいて，あとは会場からのご質問にお答えいただくという形にしたいと思っています。
　いかがでしょうか。岩崎さんのほうから3つを比較して，こういうところが共通しているとか，こういうところが違うという横に切った時の感想がおありでしたら，ご紹介いただけるとありがたいです。

（岩崎）　先ほどの内子の山村といいますか，そこへどうして人を引きこめたのかなと，なかなか理解できないのですが，そこを教えてもらえないでしょうか。

（岡田）　そうですね，簡単に言えば，情報発信です。石畳という地域は，彼らに一番最初に語ったのは，これから何年か先に町村合併が起こって，内子というまちの名前もなくなるかもしれないし，当然石畳という地名も存在しなくなる日がくるかもしれないし，そのようなことになったときに石畳という地域がしっかり存在していくことの大切さ，東京に出た人，大阪に出た人や広島に来た人の中に自分の故郷が石畳だと言えるような，これから50年先も100年先も石畳という地名が存在するような，そのような石畳というものを1つの夢として考えましょうということが始まりです。ですから，今，東京も，東京という言葉以上に，例えば赤坂であったり新宿であったり渋谷であったり品川であったりということですよね。それと同じように，地域の中のここの地名がそれなりの固有名詞としての存在として意識が出来るような，そのためにはそれ相応の覚悟をしなければなりません。
　少し話が長くなりますが，水車祭りをやりましたとお話ししましたが，11月3日が開催日です。11月3日というのは内子町全域が文化の日で，いろいろな行事が公民館でやられていて，そのようなときに水車祭りをやっても誰も街から来てくれないだろうと言われました。そのとき彼らに語ったことは，しっかりと競合しましょう，戦いましょうということです。よその公民館活動に負けるような水車祭りなら，最初からチャレンジするなと。日を選ばないと来てくれないようなつまらない水車祭りではなくて，公民館活動を中止しても石畳に行ってみようというだけのものを，みんなで考えようではないかということでスタートしまして，周辺の公民館のお祭りは全部潰れました。石畳が残ったために。そういうものだろうと思います。地域づくりというのはある種の地域間競争でもある訳なので，私はきちんと戦いというものの本質を皆さんに教えてあげないと駄目だろうなと，仲良しクラブでは地域づくりをやれる時代ではないだろうと割り切っています。

（澤田）　私どものところは，いろいろな形で集落全体でやっていることもありますが，先ほどから皆さんがお話しされたように地域振興，地域づくりの目指すものといいますか，最終映像というと少しおかしいですが，私から見ると住民の皆さんがいきいきと安心して暮らしていける，そして次に継承していけるというような思いがあるのですが，その辺りを，また地域をどのようにしていくのか，もう少し掘り下げて伺ってみたいと思います。いろいろな活動の中で，イベントがイベントで終わってしまっては意味がないので，私もイベントはひとつのとっかかりにいるのかなと思ってみたり，地域全体としての思いは負けないというのもあるのです

が，その辺りの目指すものといいますか，地域がどう回っていくのが，一番私たちが目指す所なのかというところをどう思ってらっしゃるのかをお伺いしたいと思います。

（岩崎）　私どもの三次市の青河町という地域も，人口が500人しかいません。町内ではよくお話しすることなのですけれども，全国的にも人口がだんだん減ってきている時代なので，取り合いばかりしていっても仕方がない。それなら，どこまでで地域の運営ができるか。私たちのところで言えば，10歳ごとに人口の比率を出していって，200人なら運営できないか，300人ならできるかなと。地域として最小限残していけるといいますか，自分たちの地域を守れる，そのようなところを基本に考えていこうではないかということを話はしているのですが，まだまとまったものというのはありません。

（岡田）　抽象的な言い方ですけれども，地域が目指す究極というのは自立ということなのだろうと私は思います。自立は，イコール自治，自ら治めるということにもつながることでもあるのですが，自立するにしても，自治が確立されることにしても，やはりその背景には人が育つということがそこに存在しない限り，どんなに立派なハコモノを作っても，どんなに立派な組織を作ってみたところで，やはり担い手としての人，キーマンが育つか育たないかということが，私は究極の目指すべきものではないかなと思います。
　今，岩崎さんにしても澤田さんにしても，レポートしていただきましたけれども，こういう場に出て，きちんとした地域づくりのレポートができるという人が存在することが，地域づくりの究極の目的なのだろうと思います。そのような人が育つために，皆さん，いろいろな形で汗をかかれるのではないだろうかなと。終わってみたらどうなのだといったときに，Ａさんができた，Ｂさんができた，Ｃさんができたと。それぞれの地域の活動領域の中で，応分の担い手が育っていくということが究極の狙いになっていかない地域づくりというのは，何かハコモノが出来たら終わりだなということになりそうで，私なりにはそのような視点で，今まで汗をかいてきたつもりです。

（吉川）　はい，わかりました。
　それでは，今度は会場からの質問とお答えをお願いしまして，その時間にあてたいと思っています。最初にパワーポイントで，私がこういうことを共通問題意識としていますよということで，3つ項目を挙げたものを，もう一度パワーポイントを出してもらえますか。会場の皆さんも，今のお話を受けて，皆さんがさらに突っ込んで聞きたいことがありましたら，どうぞ。
　この3ページ目ですね。次です。このようなことを共通の問題意識として，３つのレポートを作っていただいたということもありまして，このことも参考にしながら，どうぞ会場の皆さんからパネリストの皆さんに，質問ないしご意見をお願いしたいと思います。手を挙げていただけば，マイクがいくと思いますので，どうぞ。

（質問者）　島根県から参りました。本日のお三方の発表は本当に素晴らしい発表で，本当に長い間地域づくりをやってこられたなと，体験に基づいた本当にいい話を聞いたと思っています。最後に岡田さんの方から，一番大切なのは人づくりだという話がありました。岡田さんの考え方は本当に素晴らしくて，私自身も初めて聞くような本当に厳しい思いの中でのいいアイディアが出ていたと思うのですけれども，岡田さん自身が内子の中で自分の後継者が育ってきているのかということをお聞きしたいと思っておりますし，それからまた，岩崎さんも澤田さんもそうですが，それぞれの地域で次の後継者が育ってきているかどうかということと，10年後にどういうふうに運営していこうとお考えになっておられるのかと聞いてみたいと思います。

（岩崎）　私たちのメンバーは9人いる訳ですが，申しましたように異年代となっております。同じ年代ばかりでいくと，上るときはざーっと上る，しかし上り終わったら落ちてしまうということもあろうかと思います。そこで，特に意図的という訳ではないのですが，それぞれ違う年代の方々の意見ですとか知恵を利用できるのが一番いいのではなかろうかということで，年代的にも親子ほど違う年代を揃えております。その理由の1つとしては，継続させるためが1つ，もしくは喧嘩というと言い方が悪いのですが，互いに意見を聞くことができると。同じ年代同士ではやはり意見の食い違いが出て，なかなか素直に聞くことができません。しかしながら，あのおじいさんが言うのなら聞こうかとか，あそこの息子が言うのだから聞こうかとかという形で，うまく回っていくのではないかというところで，人数もあまり増やす気はありませんし，増えるのは借金だけでよかろうというふうなところで考えております。

（澤田）　人づくりですが，私もまだ60になったばかりでございまして，私が知っている限りでは，70代，80代の方が大変頑張っておられた時代がありました。私自身は昭和47年くらいに地元に帰ったのですが，そのときは本当に地域は静かと言いますか，沈んでおりました。何もしてくれない，何もしない世代というふうに年配者を思っていました。地道な活動はされておりましたけれども，本当に派手なものはなかったということで，考えてみれば，それが田舎の生き方だったのだろうなというふうにも思っています。何とかしてやろう，何とかしたいと思いながら，私は育ってきたような気がしますし，今現在があるように思います。教育はそうしたもので，与えれば与えるほど成長していくかと思えば，そうでもないこともあります。何も与えなければ自分でやってみるということもあると思います。一概には言えないということもありますので，自分が出来ることを今やるしかないかなということで，人を育てることも同じと考えておりまして，いろいろなイベントをやりますが，そうしたところでいろいろなことに関わっていただく。関わらない人はそれなりにまた別の分野で頑張っているのだろうなと思いつつ，育ってほしいなと思いながらやることが人を育てることかなと思います。背中を見て育ってほしいという言葉がありますが，それに期待をしております。10年後どうなるかと言われれば，「ではこの人に」という思いはございません。どなたがリーダーになってもやっていけるようにしてほしいという思いを持ちながら，活動を続けていきたいと思っています。

（岡田）　基本的には，澤田さんが今，言われた通りだと思います。私も格別後継者を育てるという意識は全く持っておりませんし，持とうとも思いません。要は，私のような生き様を後の人たちがどのように受け止めているのか，「岡田のように苦労しなければいけないのなら，私はあんな暮らしは嫌だよ」と言う人もいる訳ですし，あそこまでやれるのはうらやましいと思う人もいるかもしれないし，そういうことを大なり小なり感化されることを通して自己実現の姿として，例えば私なら私というキャラを目標にしてくれれば，その人が結果的に後継者になっていくのかもしれないということで，この質問をよく受けるのですが，島根の藤原洋さんなども私たちと一緒にまちづくりを進めてきた仲間でもあるのですが，後継者づくりと口で言うほど，なかなか世の中甘くはないので，できたら若い人の中から1つの目標になれるような，私なりのあり方というものをどう提供してやるのか，どうプレゼンテーションしてやるのかということに頼る以外にないだろうと思います。あえて後継者学習とか後継者教育とかをやっても，そのようなものはやっても意味がないだろうと思っております。

（質問者）　甲田町の小原地区から来ました。私の地域は，今，ＪＲが通っていて，駅もちゃんとあります。県道もすぐ前にあるのですが，ほとんど商店街がない，店も何もないという地

域なのです。そういうところで危機感を感じて，いろいろなことをやっていれば，もっと何かできたと思うのですが，皆さんの共通点として，やはり危機感というものを持たれて，そういうことをされたと思うのですが，それを地域全体に広げていかなければいけなかったというふうに思います。それをどのように1人の方が地域全体に広げられていったのかということと，もう1つ，岩崎さんが非常に近くだと思うのですが，若い人たちはどこから移転されてきている人たちが多いのかについてお伺いしたいと思います。以上です。

（岩崎）　そうですね，そんなに深く考えたことはないです。実質的に周りの人がだんだんだんだんと減っていく，お祝い金は持っていかないけれど香典は持っていくという，目に見えてだんだん減っていくと，別にそれぞれが考えなくても誰もが現実として自分の住んでいる地域で感じる訳です。ではどうしたらいいかということで，我々は当初から9名で始めた訳ですが，その9名は話をしながらみんな同じ認識が持てた訳です。基本となったのは小学校だった訳ですが，我々の地域の小学校は昔から小さな所でしたので，なかなか行政では立ってくれるところではなかったのです。それで地域の住民が継ぐということで，奉仕で出て，耕地を拓き，いろいろな作業をし，そういうことを通して成り立っている地域な訳です。我々はそれを目の前で見てきました。そうしたら，今までやってきたじいさん，ばあさん，隣のおじちゃん，おばちゃんたちの努力を，どうしても忘れることが出来ない訳です。そのためにどうにかしようというところから始まっている事業でもありますし，みんながそういう思いで一致していました。最初，地域全体で歓迎したかというと，地域によそ者が入ってくるのはどうかなということも，当初は聞きました。しかし，だんだん人が家族連れで来て，近所で子どもの声が聞こえると，子どもの声はいいものだなという認識を持つようになって，我々の事業も地域として受け入れてもらえる状態になってきました。そうすると，地域の方も新たに入って来られた家庭に大根を置いていってくれる，筍を置いていってくれるというような中で，受け入れ体制も充実してきたというのが，今の認識と現状です。

　我々の地域に転居して来ていただいている方は，当初は遠方がものすごく多かったのです。横浜であるとか，茨城であるとか，神戸であるとか，遠いところからの方が非常に多ございましたが，ここ最近ではわりと広島市内の方とか尾道方面の方とか，近くがだんだん増えてきております。

（澤田）　先ほど少しお話しましたが，危機感は帰った時にすごく思いました。20代が4,5人しかいなくて，これはどうなるのだろうと思いました。お酒を飲みながら話をしていくうちに，心配することはないと思いまして，とにかく楽しいことをみんなでやろうということで，ずっとやってきたように思います。そうした中で，年を追うごとに出ていった若者が帰ってきたりして，25,6人になったときもあります。現在はもっと増えてますけれども，年代を重ねていきますと，帰ってきた人たちが結婚をし，子どもができます。また人口が増えていきます。よそに出て行った人も帰ってくるということで，私どもの所はＩターンで遠方から来られたという方は1組しかありません。あとはほとんど全部Ｕターンです。地域が元気になるというのは，そこに住んでいるみんなが楽しいことをやって，いきいきするのが基本だろうと思っていまして，これがなかったら人も来ないだろうし，そこに住んでいる人が楽しくない。都会の人はよく言うのですが，田舎に来るとよいのだろうなと思っておられますが，田舎は何もしなければ住みよいところではないのです。私たちはいつも話をするのですが，本当にないと思います。交通の便は悪い，雪は降る，交通事情も悪い。なぜ住むのかというと，やはりそこを住みよい所にしようとして住むから楽しいのだし，よそから見られていいなと思われるのだろうと思います。やはり楽しんでいく，みんなで楽しんでやっていくことが一番の基本ではないかと思っていま

す。

（岡田）　危機感というのは，本音で語る危機感と建前で語る危機感と，中身が全然違います。日頃，茶飲み話でする危機感というのは，大体評論家の立場でもって「まちも右下がりでどうしようもないな」と。でも現実にまちの中に住んでいる人たちというのは，職業があって，一定の収入があって，だからまちの中で生活してらっしゃるので，そこで貧しいながらも食べていける人にはそんなに大きな危機感は存在しないのだろうと私は思います。私自身が持った危機感というのは，具体的にお話しますけれども，合併以前の内子のまちの人口が1万5千人くらいでしたか。毎年300人から500人くらいの人が減っていました。過疎で。このペースでまちから人がいなくなっていくと，私の給料を払っていくまちの人が本当にまちの中からいなくなってしまうと，それが最初にお話をした公務員倫理の話なのです。

（吉川）　はい，どうもありがとうございました。もっと質問があると思いますし，私のほうも事前にメールでもらっていたものもあったのですが，紹介できないことになり申し訳ありません。時間がそろそろまいりまして，私が簡単にまとめて次に移らなくてはいけないのですが，こういう形でパネルディスカッションをやりまして，まとめるというほどではないのですが，感じたことを2点ほど申し述べさせていただきたいと思います。

1つは，皆さんの報告あるいは質疑で出てきましたが，「自治意識」というと大げさになりますが，自分のところを自分で何とかしなければとか，あるいは仲間を募って何かをやれば地域社会あるいは自分の地域で感じていることを解決しようという動機というものは，どんなところにも潜在的には眠っていて，それをどのような形で顕在化させるかによって，今日のいろいろな事例のようなことが出てきているのではないかという感じがしました。「自治意識」というのがその延長線上にあるのでしょうが，とにかく自分たちで解決して，仲間を募って，競争して，外にアピールできるのだということをやってきたのが，今日の会社の形であれ，振興会であれ，あるいは内子の歴史であったというふうなことを1点目として感じたことです。

それから2つ目は，1人の人間の力は結構大きいという感じがします。まちづくりという地域の話を聞くと，必ずそこに誰それさんというのが出てくる訳です。誰それさんというのはその地域社会の中で初めに何かに気付いて，これはまずいのではないかということで，先覚者として気付いて，それを伝えて，地道にまちの中で話していくうちに，だんだん協働者が生まれてきます。そうすると，ある1人の人がやってきたことが，10年も経つと，まちの全体を動かしているという意味では，1人の人の力は大きいものがあるというのを非常に感じました。そういう延長線上に後継者を1人でも2人でもつなげていけば，まちづくりを継続させていく力にもなるといったところを皆さんが感じていることだと思いました。

この2点を感じて，今日のパネルディスカッションをこの辺で締めさせていただきたいと思います。またこれからも，このような皆さん方の活動紹介のホームページで見て，また皆さんのご自宅の近所でいろいろな経験をアピールしていただければ，今日のパネルディスカッションの意味があったと思います。長い間ご協力いただきまして，ありがとうございました。